① 毎月25日発行

山と博物館

第49巻 第9号 2004年9月25日 市立大町山岳博物館

企画展特集 伊藤孝一没後50年 **山岳映画誕生** 大正末、雪の絶巓(ぜってん)にカメラを廻す

会期 10月2日(土)～12月5日(日)

「昭和5年6月6日、上高地にて 逍遙中、旧知の山案内人・大井庄吉(左端)と出会う」
向かって右から赤沼千尋・伊藤孝一・百瀬慎太郎 (百瀬堯氏所蔵写真)

企画展「山岳映画誕生」の開催

大町山岳博物館

伊藤孝一没後五十年、奇しくも大町市制施行五十周年のこの年に、富山県「立山博物館」との共同企画で記念展を開催する運びとなった。

伊藤孝一は名古屋の資産家。多くの趣味を持ち、いずれの探求の深さも半端なものではなかったと伝えられている。そのひとつに登山と映画撮影があった。

北アルプスに魅了された伊藤は二十代なかばから大町・對山館を訪れ、同じ歳の百瀬慎太郎と響き合い、赤沼千尋とも知り合った。この三人の出会いから壮大な夢は醸され、実現し、その事実は映像に、そして登山史に刻まれることとなった。

大正十二年三月の「雪の立山、針ノ木越え」であり、同年十二月の上ノ岳冬期初登頂であり、十三年二月の薬師岳厳冬期初登頂であり、同年三月から四月にかけての黒部五郎・三俣蓮華・双六・槍ケ岳の縦走である。

大町山岳博物館は伊藤都留子氏(四女)や赤沼淳夫氏の協力を得て、十年ほど前から伊藤使用のカメラなどの実物資料と映像の一部を公開し、その事跡を伝えてきた。

立山博物館はことに映像原板の保存と内容の精査、公開に力を注ぎ、平成十二年には山岳映像の第一人者、羽田栄治氏とともに「雪の薬師、槍越え」を四十八分の公開作品に作り上げ、高い評価を得ている。

去る七月二十四日～八月二十九日、立山博物館において記念展「山嶽活寫」が開催され、九月四日には伊藤ゆかりの名古屋市において未公開フィルム二本の上映、布川欣一氏・羽田栄治氏らによる壇上討論、「雪の薬師、槍越え」上映の三部構成で「山岳映像企画2004」が開催された。この映像企画は十一月二十日に大町でも開催の予定である。

伊藤・百瀬・赤沼の交友、大町と立山町芦峅寺の山案内人の活躍、映し込まれた山と人・・・。

本企画展における八十年前の出来事と伊藤没後五十年の調査研究の蓄積提示によって、今に活きるその真価を探っていただければ幸いである。

趣味の登山がアルピニズムを超えたとき(前)

―伊藤孝一没後五十周年に―

布川欣一

積雪期の北アルプス黒部川上流域を横断し、さらに立山連峰の峰々を踏破して槍ケ岳へ縦走する。併せて雪山風景と自らの登山を本格的な映画に記録する――この破天荒な企ては、一九二三(大正十二)年と翌二十四年の二シーズンにわたって実行に移された。それは、大学山岳部が登山界の主役に躍り出て、ようやく雪山登頂の活動を始めたばかりの時期だった。

この雪山大縦走と映画制作を担ったのは、伊藤孝一をチーフに百瀬慎太郎・赤沼千尋を加えたトリオで、映写技師の勝野銈四郎が主に撮影に当たり、奥村吉松が同行した。彼らは、立山の西と後立山の東、両山麓の山案内人たちと信頼と敬愛の絆で結び合い力強く支えられた。

制作された「雪の立山、針ノ木越え」「雪の薬師、槍ケ岳縦走」は、本邦山岳映画史上、最初期を飾る。その完成から八十年、さらに今年は、この雪山大縦走と映画制作の中心にあった伊藤孝一の没後五十周年にあたる。

近代日本の登山と山岳映画の歴史にとどめた伊藤の先駆的な足跡は、今なお光芒を放って消えることはない。いや、ますますその輝きは増しつつさえある。この機会に、改めて伊藤の業績をふり返り、検討してみよう。

Ⅰ・對山館サロンのトリオ　伊藤・百瀬・赤沼

まず、個性豊かな主役三人の出逢いまで。

1 伊藤孝一(一八九二～一九五四)

名古屋生まれ。父を失い、九歳にして京屋吉兵衛七代目(伊藤殖産合名会社二代目社長)を継ぐ。伊藤家は代々問屋業・両替商を営み、尾張藩御用商人を勤めた家柄で、莫大な資産を蓄積した。その資産を守るために、事業を興さず地代と家賃に頼るのが家憲。

桁外れに多額の不労所得が入る主は趣味に没頭するが、伊藤の場合は、自動車・釣り・狩猟・植物・日本画・仏教美術・江戸文学・写真・登山など多彩だった。どれも並ならぬレベルで、たとえば日本古典文学コレクションの「甘露堂文庫」は、その資料的価値が高く評価され、主体部が國學院大學図書館に収蔵されている。

伊藤は一九一六(大正五)年に日本山岳会入会、会員番号は四八一。その前年ころから、富士山に登頂したり、冬の山麓を周遊しながら狩猟を楽しむ。一方、俳人・河東碧梧桐らの紀行「日本アルプス縦断記」に魅せられ、十七年には針ノ木峠から黒部の平、五色ケ原を経て剱岳に至る。十八年夏、針ノ木峠から南行して烏帽子岳へ、黒部五郎、太郎兵衛平、薬師を回り、ヌクイ谷、黒部の平を経て針ノ木峠へ戻る縦走を達成。伊藤は黒部源流山域の虜と化し、この二年続きの登山を支えてくれた大町・對山館主の百瀬と肝胆相照らす仲となる。

2 百瀬慎太郎(一八九二～一九四九)

長野県大町宿生まれ。生家は旅館・對山館を営む。大町中学校(旧制)在学中の一九〇九(明治四二)年、十七歳で日本山岳会入会、会員番号二一五。すでに十四歳の〇六年に白馬岳に登り、十一年には初雪の針ノ木峠に立ち、十三年には針ノ木峠～八峰キレット～大黒岳を初縦走、さらに烏帽子岳～槍ケ岳を踏破する。

對山館は、後立山連峰の登山基地として登山者に愛用されただけではない。百瀬が文学に傾倒し、若山牧水門下の歌人でもあったので広く文化人が集うサロンだった。交友関係は、辻村伊助、石川欣一、槇有恒、茨木猪之吉、山田珠樹、吉田絃二郎ら多士済々。

また百瀬は、一九一七(大正六)年、大町に本邦初の登山案内人組合を設立し、自ら組合長となる。組合は、登山者の便宜を図り、金銭的トラブルを防止すると同時に、山案内人の技術・モラルの向上と生活保障を目ざした。のちに百瀬は、大沢小屋(一九二五年)と針ノ木小屋(一九三〇年)を開設する。

一九二三年一月に、百瀬は、富士山スキー初登山者のひとりを招き、大町の東山乗越でスキー講習会を開催した。これに伊藤や赤沼を誘ったことが、主題の雪山大縦走と山岳映画撮影に至る直接の契機となる。

3 赤沼千尋(一八九六～一九七九)

長野県有明村(現、穂高町有明)生まれ。生家は大地主で山繭の生糸工場を営む。幼少期は病弱のため家業所縁の茨城県大洗で過ごすが、長じて登山に親しむ。一九一〇(明治四三)年、十四歳にして初めて燕岳頂上に立ち、夕暮れの山岳景観に心を奪われる。

少年の夢と憧れが燕小屋(現、燕山荘)開設に結実したのは二十一(大正十)年。周囲の猛反対を受け、日本山岳会筋からも非難されるが押し切った。白塗りの建物で二段式ベッドを備え、コーヒー、紅茶、カレーライスまで用意した。当時、超ハイカラな山小屋だった。

評論家で登山家の浦松佐美太郎は(開けっ放しの無邪気な人物)といい、伊藤は(飄々蹣跚)として掴みどころのない、時によっては重箱の四隅に着いた餡を針の先で穿くるような程度にまで緻密)という。山ばかりでなく、書画・文芸に造詣深い家風を継いだ趣味もあって百瀬と親交を結び、伊藤を識る。

上高地にて大正13年4月22日撮影と推定される記念写真
向かってカメラ右側の中央3人、左から赤沼千尋・伊藤孝一・百瀬慎太郎(伊藤都留子氏所蔵写真・立山博物館提供)

Ⅱ・大正期「リベラルな空気」と登山状況

伊藤孝一らの活動を跡づけ検討する前に、それまでの本邦の登山や社会の状況をみておく必要がある。大正期(一九一二～二六年)から昭和初期に至る時期は、近代日本登山史上の一大転換期にあたり、そのなかで伊藤らは、時代の相を色濃く映し、けっして小さくはない役割を演じているからである。

1 日本山岳会設立と「探検の時代」

本邦登山史の明治期は、江戸時代以来の信仰登山が衰退しながらも根強く引き継がれる一方、山岳へのさまざまな新しい関わり方が錯綜した。だが、一九〇五(明治三八)年の日本山岳会設立がひとつの転機となった。

日本山岳会はウエストンの強い勧めがあって設立された。会員は、各地高山の位置や登頂ルート、縦走路、未知山域を精力的に探り、日本登山史でいう「探検の時代」を推進した。明治末期には、登山の本場ヨーロッパ・アルプスを目ざす者も現れたが、新しい活動の模索が始まる。時代転換への序奏である。

2 スキー・沢登り・山旅・静観派

そのひとつは、スキーの移入を契機とする雪山指向である。明治末期にオーストリアからもたらされたのは山岳スキー術で、それは、高田(新潟県)と旭川(北海道)を起点に近隣の中学校・女学校(旧制)の教員・生徒へ、さらに民間へと急速に広まった。

これにより、無雪期に限定されていた登山が、一挙に年間を通した活動におし拡げられた。積雪期の妙高山、羊蹄山、富士山へのスキー登山を皮切りに、「スキーで雪山へ」が大きなトレンドとなっていく。

つぎに、渡渉・登攀の技術を駆使する「渓谷の遡行(沢登り)」が、登山活動の一分野として確立された。舞台は北アルプス山中深く食いこむ黒部渓谷。急流で両岸に峭壁がそそり立つ本流と、それに注ぐ枝沢のほとんどを踏査し、十字峡や剱大滝などを発見した活動に拠る。沢登りは日本独特の登山活動だ。

いまひとつは、日本に伝統的な「山旅への回帰」ともいえる活動で、奥秩父の深林と渓谷に日本山岳美の典型を見いだす。登頂にのみ価値をおくのではなく、登山口から下山口までの全行程を通して、自己と自然との融合を図ろうとしたのである。

まばゆいばかりの「探検登山」の果てに、「秩父会」にたどり着いた人びとのこの登山観は、一九一九(大正八)年設立の「霧の旅会」に引き継がれる。この会は、高原や低山趣味を重んじ、山ふところに抱かれて自由に自然と対話し、そこで得た感興を詩文や絵画で表現し交流することを提唱した。この系譜の人びとは「静観派」と呼ばれ、優れた山岳芸術を生む母胎となり、今日なお強い影響力をもつ。

3 「リベラルな空気」に覆われて

伊藤らが登山に親しんだ大正期の日本には、明治期とは明らかに異なる時代の相がある。

日露戦争に勝った日本は、第一次世界大戦(一九一四～一八年)では連合国側に与して戦勝国となる。貿易額を三倍にも増やす「漁夫の利」を得たうえ、戦後設立の国際連盟では常任理事国になり、「列強国」参入を果たす。

一方、経済規模が急成長をとげた国内では、第二次・第三次産業の就業人口が増加して都市への人口集中が進む。それは、農地・山林・河海などの自然を離れ、労働(生産)の場と生活(消費)の場とが乖離した暮らしを営む人びとの増大を意味する。彼らは、一定時間の労働によって衣食住の保障を得られるものの、自然から疎外される近代都市の生活者である。

世に「大正デモクラシー」という。日露戦争後から男子普通選挙法成立(一九二五年)に至る二十年間、政治・社会・文化・教育など広い分野でデモクラシー指向の運動が著しかった。二十世紀初頭の世界からさまざまなイデオロギーが押しよせ、都市を中心に日本社会は、ある種「リベラルな空気」に覆われる。関東大震災でダメージを受け、治安維持法で天皇制・私有財産制の否定はタブーとされたけれど――。

以下に述べる、ブームといえるほどの登山の大衆化状況も、アルピニズムの開花も、このような空気のなかで生じた。伊藤らの思考も活動も生活も、けっして例外ではない。

4 登山のブーム的大衆化状況

正確な数字を得ていないので断定はできないが、大正期には、ブームといっていいほどの規模で大衆的登山が広まった、と推測できる。その根拠を挙げてみよう。

まず、登山情報の種類と量の飛躍的増大。

一九一三(大正二)年夏、陸地測量部(現、国土地理院)が、五万分の一地形図を南北アルプス関係図幅から販売し始めた。明治末期以来、「探検の時代」の担い手・多彩な文筆家・アルピニスト・静観派の人びとによる著作刊行が相次ぐ。山域ごとのガイドブック刊行が本格化し、これらを併せて、出版界に登山分野がジャンルとして確立されてくる。さらに市町村、鉄道・バス会社、旅館ホテルなどの各種パンフレット類が、さかんに登山を誘う。

上記の動向は、各地で進む登山者受け入れ体制の著しい進展と対応している。

大正期、現在の高山線、大糸線、飯田線などが開通し始め、駅から登山口へ乗合馬車が運行されたりして、アプローチが容易になる。十六年、松本小林区署(営林署)が、上高地～槍沢～槍ケ岳、燕岳～常念岳～槍沢の登山道を整備。そのルートや白馬岳を複数の皇族が登り、そのたびに新聞が大きく報じる。この報道は、かつての「探検」の場はすでに「安全」だと印象づけ、登山への関心をよびおこす。

明治末期開業の白馬岳山頂小屋は、大正期には増築を重ね、白馬尻の岩窟を改修し、白馬大池に山小屋を開く。また、信濃山岳会の唱導で長野県や教育会が大沢(篭川谷、伊藤らが利用)などに石室の避難小屋を設け、赤沼による燕小屋など営業山小屋の開設も続く。アルプス旅館(現、槍沢ロッヂ)、常念小屋が赤沼に先んじ、大槍小屋、殺生小屋、一ノ俣小屋が後を追う。そして二十五年には穂高、二十六年には槍の頂上直下にも山小屋が建つ。

登山客の案内や荷物運びは、山村の人びとの新しい収入源となるが、その仕事を秩序だてたのが登山案内人組合である。先述、百瀬による大町に続いて、この種の組合設立は、燕、白馬、常念、槍穂高、乗鞍などの山麓へ拡がる。

以上、列挙してきた新しい動向は、それを必要とする者がなければ生じまい。学校集団登山の急増だけでなく、一般登山者の大量出現を推測させられる所以である。そして供給はまた、相乗効果によって新しい需要を生む。

一九一五(大正四)年の焼岳爆発による大正池出現を機に、上高地観光地化の動きが強まる。官民一体の観光産業は、登山を新しいアイテムにして市場開拓にのり出した。そのターゲットこそ、近代都市の大衆にほかならない。

5 「岩と雪の時代」とアルピニズム

日本登山史を大転換させる快挙がヨーロッパ・アルプスからもたらされた。一九二一(大正十)年九月十日、槇有恒がアイガー東山稜の初登攀を達成した、との報である。十二月、槇は「アルピニズム」を携えて帰国した。それは、「より困難な登攀」を目ざす登山思想、雪線以上の高岳で岩と氷雪に対処する技術とそのための用具の活用などを内容としていた。

国内では、大学山岳部の学生やOBによる「スキーで雪山へ」の活動が際だち始めていた。板倉勝宣(学習院～北大)は一九年と二十一

年の三月、独りスキーで常念乗越から槍沢に入って積雪期槍ケ岳登頂を探り、二十二年一月には大雪山旭岳スキー登山。二十年三月、大島亮吉(慶応)らが白馬杓子岳にスキー登山を試み、二十一年一月、松方三郎(学習院～京大)らがスキーで燕岳登頂。その年五月、舟田三郎(早稲田)らが積雪期の燕～槍を初縦走。

槇は、冬の登山で雪と氷の山稜や斜面に対処し、岩登りで断崖を上下する技術を会得せぬ限り、〈アルペンとかヒマラヤ〉に登るのは不可能だ、と強調する。そして慶応や学習院などの学生らを率いて、二十二年三月に積雪期の槍ケ岳に登頂し、八月には穂高岳涸沢で岩登り合宿を主宰したのである。この間、三月には三田幸夫(慶応)らがスキーで立山と剱岳に初登頂し、また七月には板倉・松方らと舟田らのパーティが、それぞれ槍ケ岳北鎌尾根の岩稜を攀じる。二十四年一月には、舟田らが「より困難な」厳冬期の槍ケ岳に初登頂。

いよいよ「岩と雪の時代」が本格化し、一方に一般登山者が増大する登山の両極化状況が進む。

Ⅲ・雪山大縦走と映画撮影の破天荒ぶり

1 「破天荒」生んだ對山館炬燵談義

伊藤の一九二三(大正一二)年は初体験のスキー講習会(大町・東山乗越)受講で始まる。百瀬に誘われ、赤沼らとともに一月三日から對山館の客となって、講習は九日まで。その間の炬燵談義から、破天荒な計画は生まれた。

この一週間ばかりの間に、百瀬・赤沼両君と私との間に雪山の話題が擡頭してゐたのである。夫れも三人の中、誰が言出したのか今では覺えてゐない。恐らく夢中に語り合ふ山の夜話が、次から次へと段々高じていつた結果であつたに相違ない。或は毎日馴れ親んだ玲瓏の後立山、紺碧の大空に清白を競ふ頸域の峯や、斯うした環境が吾等を誘ふ魅力となつてゐたでもあらうか。

(中略)吾々は凍み通るやうな寒さを障子一重に避けた炬燵の中で、計画を進めながら、少しづゝ心の用意を整へていつた。

「針ノ木峠を越えて立山温泉に至り立山に登る」計画をたてた三人の初動は、十二日から往復四日を充てた〈大沢の石室〉視察だった。その結果、〈吾等の意志は決した〉。

一か月後の二月十五日夜、伊藤は番頭の堀田銀一を名古屋から富山へ発たせる。コース中間の拠点、立山温泉に直行し、物資補給と救援の準備に当たらせるためだ。この措置が、結果として実に有効に機能した。その五分後の汽車で、伊藤も勝野と奥村を伴い松本へ向かう。

十六日早朝、松本着。勝野を大町へ直行させるが、伊藤は奥村と〈松高思誠寮ニ福林氏ヲ訪フ〉。福林は松本高校(旧制)山岳部員、一月に大町からの帰途、赤沼と足をのばした浅間温泉で識った若き岳友だ。伊藤は、今回の計画を伝えようと、〈猛裂ノ降雨〉のなかを立ち寄った。福林も後日、これに応える行動をとる。さらに伊藤は信濃山岳会事務所に回り、計画を伝えて勝野と奥村の入会手続をとる。どちらも、万一の場合に備えた措置だった。

大沢石室へ向かう伊藤隊
(伊藤都留子氏所蔵写真・立山博物館提供)

その日は有明の赤沼宅に泊まり、十七日に對山館に入る。十八日はスキー大会に参加。十九日、横浜の竹内鳳次郎・いさ(遺族によれば「ひさ」)夫妻が對山館に来る。数年前から夫妻ともに後立山連峰や剱岳(一九二〇年、いさ女性初登頂)などに親しんでいる。この夜、赤沼が到着する。

2 針ノ木峠越え　挫折から再挙へ

二月二十日、降雪のなかを大町出発。伊藤・百瀬・赤沼・勝野・奥村に、竹内夫妻が大沢まで同行する。北沢清志をチーフ、黒岩直吉をサブに大町山案内人組合の十五名を加えた大パーティは、大出の遠山宅と畠山の小屋に泊まって、二十二日〈午後三時三十七分〉、大沢石室に着く。

だが、〈小屋全ク埋没セリ〉。掘り出し作業に二時間を要したうえ、〈白樺ノ生木ニ終夜煙ル〉状態。二十三日は〈一同両眼ヲイタメテ終日不愉快〉。竹内夫妻の下山に黒岩らが同行。石室の排煙不具合に懲りて天幕を張って寝るが、明け方には零下十九度の寒気が襲う。二十四日、快晴に乗じて周辺を撮影。二十五日は雪だがスキーを試みる。朝、黒岩ら五名を手紙発送と食糧補充のために下山させる。二十四日に黒岩が「伊藤隊、消息を絶つ」「十七名瀕死」など新聞の誇大な遭難誤報をもち帰ったので、それに対処する手紙の発送である。

二十六日、黒岩らの戻りを待つ小屋へ、午後二時ごろ、〈吹雪ヲオカシテ針木ヲ越エテ來タ越中ノ人夫〉が着いた。立山温泉に籠もる堀田が、伊藤らの動向がつかめぬ不安から講じた探索行動である。彼らは、前人未踏の厳冬期初の針ノ木越えを果たしたのであった。

ソノ勇猛果敢、勇壮凄絶、ナント形容スルモ足リヌ。全身ニ氷雪ノ鎧ヲマトイ、胡椒デ塗リカタメタル人形ノゴトキ八人ノ衆。ワレワレハ感激ノ涙ニクモル目デ彼ラヲ迎ヘ、カタイカタイ握手ヲ交ワシタ。

伊藤が篤い敬意をこめて記す八人の名は、佐伯嘉左衛門　福松　宗作　政吉　忠太郎　鶴松　志鷹喜一　光次郎

吹雪がつのる。二十七日が明けると、大町の山案内人たちは下山を申し出てくる。

大町人夫ノ全部、大沢ヲ引上ゲ吹雪ヲ冒シテ下山ス。越中ノ人夫八名、小屋ニ殘リ吹雪と戰フ。(中略)越中ノ人夫、一時下山ヲスゝム。一行、遂ニ一時下山、再挙ヲ富山方面ヨリスルコトト決シ、明日下山トス。

二十八日午前十時三十分、大沢出発。午後四時四十五分、大出に着き休憩。午後八時、對山館帰着。

【つづく】

(登山史研究家)

※この論考は富山県[立山博物館]の平成十六年度企画展「山嶽活寫」に関連して書き下ろされた原稿を、筆者と富山県[立山博物館]の許可を得て転載したものである。

訃報　大町山岳博物館顧問の平林国男氏が平成十六年九月二十日に逝去されました。ご冥福を心よりお祈りいたします。

山と博物館　第49巻　第9号
二〇〇四年九月二十五日発行
発行　〒398-0002 長野県大町市大字大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館
TEL　〇二六一―二二―〇二一一
FAX　〇二六一―二二―二二三三
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www2.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/
印刷　㈱奥村印刷
定価　年額一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―一三三九三

R100　PRINTED WITH SOY INK　この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。